

## 【授業報告】

毛筆書道「篆刻ゲスト授業」の実践  
～プロの篆刻家によるワークショップ～\*

鈴木慈子\*\*

## 1. はじめに

書道作品には、落款（らっかん：「落成の款識」の意味で、巻物の巻末や掛軸の一端などに筆者みずから姓名や号、制作年月、干支などを書くこと。）の後に印<sup>いん</sup>を押し、制作を完結させるならわしがある。墨痕鮮やかな本文と朱の印が織りなすコントラスト。落款印が作品に及ぼす効果は大きい。

かねてから筆者は、「毛筆書道」選択の学生達に「篆刻<sup>てんこく</sup>」の専門家のご指導を仰ぎ、印の制作を行いたいと願っていた。通常の授業では、古典の臨書を中心に、書の基礎力を養うことを第一の目的とした指導を行っている。繰り返し「練習」することが中心となるが、さらに「作品」の制作に展開しようとする際、学生自身に戸惑いがみられることがある。自分の印を作成し、押印する作業を加えることで、「作品」を作っているという意識を涵養するようになり、積極的な取り組みを期待することができる。また、制作した印は、年賀状など日常的にも活用することができ、メールやSNSを使いこなす学生にとって、「書」を身近に感じるきっかけともなるだろう。

2013年度後期、表現文化学科の先生方の後押しをいただき、毎日書道展篆刻部審査会員吉永隆山先生をお迎えし、90分1コマの「篆刻ゲスト授業」を実現することができた。ここにその授業報告をまとめ、篆刻とはなにか、についても触れたいと思う。

## 2. 篆刻（てんこく）とは

篆書で印<sup>は</sup>を刻ることを「篆刻」という。篆書以外の書体を使うこともあるが、書道作品の落款や日本画のアクセントとして使われる印を制作することを指し、実印や銀行印などの実用印とは区別をしている。また、書道の一分野として各公募展には篆刻部門が存在し、その芸術性を追求している。

起源は中国古代春秋戦国時代（B.C.770－B.C.221）に官僚制度が出来、その役職の証明として

---

\* A Report on Seal-Engraving in a Calligraphy Class: A Seal-Engraver's Workshop

\*\* Yoshiko Suzuki 十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 (Department of Culture and Communication)  
キーワード：篆刻概説 専門家 ワークショップ 作品化 毛筆書道

作られたものとされる。その頃は主に「銅を主成分とする合金」などの金属を材料とし、鑄造されていた。現在は、石（石といってもロウ石のような軟らかい質のもので中国産）を材料とし、その石に篆書という書体を使って刻するのが一般的である。

文字部分を凹刻りし「白線」で表現する「白文印」（写真1：吉永隆山刻「春」）と文字部分を凸刻りし「朱線」で表現する「朱文印」（写真2：吉永隆山刻「瑛」）の2種類がある。1顆（か：印を数える単位）で押す場合は、朱文、白文のどちらを使用しても構わない。2顆を押す場合は、通常、姓名を白文印、雅号を朱文印とし、白文印を上、朱文印を下に押す。

### 3. 篆書について

篆刻に使用する篆書は、現代でも印章に用いられている書体で、大まかに次の4種に分類される。甲骨文を除いた3種が、主に篆刻に使用される。

《甲骨文》 殷・周の時代、占いのために亀甲や牛骨に刀によって刻まれた文字。

《金文》 紀元前（BC）1100年ごろ～770年の西周時代、金属器（鼎など）に鑄こまれた文字。

《小篆》 BC221年、秦の始皇帝は天下を統一すると、宰相の李斯に命じて文字を整理し一つのスタイルにした。これが小篆である。

《印篆》 BC202年以降の漢代、印に使われた書体。印に使用するため、小篆を直線的かつ装飾的に簡略化した形が多い。

以下、『世界の文字の図典 普及版』（世界の文字研究会編 吉川弘文館 2009年）から、それぞれの書体について概観する。

金文には、殷金文と周金文がある。殷金文の特色としては、原始的象徴の図様が、文字とも文様ともつかぬように刻されていることが挙げられる。その殷金文の流れを汲みながら、次第に字体もよく整っていったのが周金文である。

小篆は、戦国時代の秦の字体（大篆）を簡明化したものである。一般的に篆書といった場合はこの小篆を指す。小篆の書風はみるからに端正であり、後世の模範とするに足るものとされる。

印篆は、その名称の通り印章に収めやすいようにした書体である。

### 4. 篆刻ゲスト授業の概要

講師、日時などを決定し、対象受講生は「毛筆書道」選択者1、2年生29名とした。受講生には、早めに次ページのような通知を出した。

90分の授業では、制作の全プロセスをこなすことはできない。講師吉永先生と連絡を密にとり、筆者が担当する授業内で、あらかじめ「撰文」「検字」「印稿制作」を行うこととした。

「印材の整形」「字入れ」は、吉永先生がご自宅で担当してくださるとのお申し出があり、ご好意に甘えた。

### 毛筆書道「篆刻ゲスト授業」について

- 《日 時》 平成26年 1月10日（金） 3限  
 （12：40集合・4限の授業がない人は少し終了が遅くなります。）  
 欠席、遅刻のないようにしてください。
- 《講 師》 吉永 隆山先生  
 女子美術大学講師（芸術学部美術学科）  
 毎日書道展審査会員  
 吉永隆山篆刻教室主宰（新宿、横浜、吉祥寺、自由ヶ丘）  
 ※HPあり・・・吉永隆山で検索してみてください。
- 《準 備》 ◎石は1.7cm×1.7cm そのなかに1文字希望の字を刻し、持ち帰ります。  
 ◎字は、基本的に自分の名前から選ぶ。<sup>え</sup>干支でもよい。あまり画数の多い字は、刻すのが大変なので注意。  
 ◎12月20日の授業で字を選ぶ。（撰文）  
 資料「篆書の字例」の「印篆」の中から自分のほりたい文字をピックアップ。資料にのっていない文字は、字書で調べる。（検字）  
 ↓  
 別紙を参照して、半紙に印稿を書き提出する。  
 ↓  
 吉永先生にお送りして、全員の印材（石）に字を書き入れてきていただく。（字入れ）  
 ◎1月10日 吉永先生から各自印材を受け取り、解説をしていただきながら篆刻制作をする。先生の指導を受けながら、実際に使える印を完成させ持ち帰る。

篆刻制作の工程については6.に詳しく記す。

## 5. 篆刻に用いる用具、用材

- 《印 材》 今回は遼寧凍石（中国遼寧省産の石印材。透明感のある美しい石）を使用する。他に、青田石、寿山石、巴林石などがある。
- 《硯・墨・筆》 今回の授業では使用しないが、印材に字入れをするときに使う。共に朱書用と墨書用を用意する。
- 《印 床》 印材を固定する道具。今回は簡単な「プラバイスミニ」を使用する。

（写真3）

- 《印 刀》 石材を刻す刃物。平刀という刃のつきかたに特徴がある。
- 《印 泥》 印肉のこと。中国西泠印社製が有名。書道作品など表装をするものには、事務用のものを使わず「印泥」を使用しなくてはならない。
- 《印 矩》 印をまっすぐに押すための定規。二度押ししたいときにも用いる。
- (写真4：右から①印材 ②印材に字入れをするための面相筆 ③印面に塗るための朱墨 ④印刀 ⑤印泥 ⑥印矩)

## 6. 篆刻制作

実際に行った「篆刻ゲスト授業」の流れに従い、制作のプロセスをまとめる。

### 6.1 撰文 (12/20 鈴木)

刻りたい文言を選択する。今回は一文字とし白文印を制作する。自分の名前から一文字、あるいは干支など刻したい文字を決める。

### 6.2 検字 (12/20 鈴木)

「篆書の字例」(写真5・6)を全員に配布する。資料にのっていない字は「篆書字典」(写真7)で調べる。いずれも「印篆」の中から選ぶ。

### 6.3 篆書の指導。印稿を書く。(12/20 鈴木)

吉永先生からいただいた参考作品「伊」のコピーを全員に配布する。(写真8)

これに従い、調べた文字を半紙に大きく墨書する。半紙は裏に墨が通るものを使用するよう、指導する。印面に字入れをするときは、印稿と左右全く逆の形(鏡文字)で書かなければならないからだ。(写真9)

篆書の基本的な技法についても指導する。○起筆は、筆を逆方向から入れ筆先を巻き込むようにする。○終筆は、強く払ったり止めたりせず、軽くもとの方向に筆を戻す気持ちで上げる。○横画を出来る限り水平に書く。○横画は等間隔に引く。

12月20日の筆者の授業内で書き上げた全員の印稿を早速吉永先生にお送りした。皆、よく書けていたとお褒めの言葉をいただき、安堵した。(写真10)

### 6.4 印材の整形 (吉永先生)

ガラス板など平面上に紙やすり(耐水ペーパー)を置き、印面を正確な平面になるよう整える。29人分すべて吉永先生に整形していただいた。磨いた印面には朱墨をぬっておく。

### 6.5 字入れ (吉永先生)

お送りした学生の印稿をもとに、吉永先生に字入れをしていただく。印稿の裏面を見て、朱墨をぬった印面に墨で鏡文字になるよう書き入れる。ご専門とはいえ、年末に29名分の字入れをお引き受けいただき、感謝に堪えない。

写真はご自宅での作業風景。印材に貼った番号シールは、学生の名簿と連動している。

(写真11)

### 篆刻ゲスト授業当日（2014年1月10日）

年が改まって初めての「毛筆書道」の授業に、吉永隆山先生をお迎えすることが出来た。東先生、星野先生、細谷さんにもお越しいただき、学生達の期待と緊張が感じられる中で授業がスタートした。(写真12)

制作6.6から6.8は、ゲスト授業当日に行われた工程である。

#### 6.6 刻る

はじめに吉永先生より、篆刻の歴史、道具の使い方などのご説明があった。

篆刻については、吉永先生からいただいた資料を参考に、本稿2.3. にまとめさせていただいた。

《印刀の使い方》吉永先生がプリントにわかりやすく図解をしてくださった。

○エンピツ持ち。○刃の角を使う。○45度くらい右に傾ける。

○往復2刀の押し刀で一本の線を刻る。(写真13～16)

《印泥の使い方》○印泥は付属のヘラで、周辺から容器中央にむかって団子状に盛り上げて使う。○印面は軽く印泥に触れるようにして、押しつけない。○陶器容器の場合、陶器部分に印材をあてると印を壊す恐れがある。そのため、吉永先生はプラスチックの容器をお使いになっているとのことだ。(写真17)

吉永先生から字入れをしていただいた印材が配られ、各自「プラバイスミニ」にセットする。

(写真18)

いよいよ実技のスタートだ。黙々と印を刻る作業が進む。

#### 6.7 押捺・補刀

一通り刻り終えたところで、吉永先生のところに印材をお持ちし、印泥をつけて押してみる。印影（押印したもの）を見ながらそれぞれに合わせた助言をいただき、席に戻りさらに刻り進めた。

最終的に先生がほんの少しだけ補刀してくださったが、印刀で印材を刻む「音」が違う。力強く迷いのない音に、学生ともども筆者も感動した。プロの技を目の当たりにすることができ、本当に幸せであった。(写真19)

#### 6.8 完成

90分の授業で果たして印を完成させることができるのか、不安があった。吉永先生の的確な指導のもと、全員見事に完成させることができた。

最後に一人ひとりの印を、吉永先生が丁寧に押捺して下さった。押印する半紙をこすって毛場立ちを抑え、まんべんなく印泥をつける。静かに押したあとは、裏からバレンで押さえる。その一連の流れは実に美しく、学生と一緒に魅了された。(写真20)

写真のような美しい印影が並び、篆刻ゲスト授業の貴重な記録となった。(写真21)

一番画数が多く、はたして刻れるのかと、心配していた中国からの留学生「董」さんも、驚くほど立派に仕上げる事ができた。(写真22)

こうして、初めての「篆刻ゲスト授業」は、制作プロセスの一部を吉永先生にお願いするという異例ではあったが、充実のうちに終了することができた。「毛筆書道」受講生の手元には記念の印が残り、末永く愛用されることと思う。

## 7. その後の授業

2014年1月24日は、通年科目「毛筆書道」の最終授業であった。一年間に書いた書作品を一冊に綴じ、各自の軌跡とした。自由にタイトルをつけ氏名を墨書した後、制作した「印」を押した。吉永先生に押ししていただいたようにはいかなかったが、各自が作った印を自分で押し、締めくくりにふさわしい授業となった。(写真23～25)

## 8. 学生アンケートから

毛筆書道最終授業で受講生29名に記名アンケートをとった。

「1月10日の篆刻ゲスト授業はどうでしたか？」の問いかけに、たくさんの回答があった。ここにいくつかを紹介する。

- プロの篆刻家に来ていただき、自分だけの印が出来上がりとてもうれしい。ゲスト授業はすばらしい企画だと思った。
- とてもわかりやすく丁寧に指導していただき、とにかく楽しかった。この印をこれからも大切に使っていきたいと思う。
- 吉永先生が、字入れをしておいて下さったので、大きな失敗もなく上手く印を作ることが出来うれしかった。
- 篆書に挑戦したのも初めて、印材をはる作業も初めての経験だったが、とても楽しかった。
- 篆刻はとても難しく、集中力と根性が必要だと思った。
- 少しミスをしてしまったものの、先生が上手くフォローしてくださり、とても良い印ができた。
- 先生の力強く石を削る音が、いまだに耳に残っている。
- 中学生のときに篆刻を経験したが、その時は上手く出来なかった。これからも使えるように、先生が仕上げを手伝ってくださり、とても良いものが出来うれしかった。
- 力を入れすぎると線からはみだし、力加減が難しかった。先生がほっているところを目の前で見て、早く深く正確に刻れることに感動した。

○最後に印泥を使って印を押し、完成したときは、すばらしかった。

○先生の篆刻作品もを見せていただき、書道の中でもまた違う味わい方があるのだと感じた。

今回のゲスト授業の学習効果は、以下のようにまとめられる。

まず、完成した「印＝作品」に対しての愛着がうかがえる。それは、「書作品」への親しみにもつながることと期待される。

また、学生は、単に篆刻の過程を楽しむだけではなく、篆刻が微妙な力加減を求められる繊細な作業であることに気づけたようである。「先生の力強く石を削る音が、いまだに耳に残っている」という感想からも、「篆刻」を体感していることがわかる。机上の学びでは経験できなかったものである。

そして、「書道の中でもまた違う味わい方がある」という感想の中には、こうした経験を経て、書道にいろいろな部門、鑑賞の仕方があることを知る好機となったことがわかる。

通年の授業が終わりに近づき、学生自身、筆を持つ機会がへることは思うが、この経験が、今後書道に向き合うときの糧になることであろう。

## 9. おわりに

篆刻の起源中国では「詩、書、画、篆刻」が文人の要素とされていた。現在の日本でも書と篆刻、双方を習得する書家はいる。しかし筆者を含め多くが、完成させた書作品に押す落款印を、篆刻家に制作依頼している。書と篆刻は切り離せないものだが、専門分野を分け、それぞれの役割を担っているのが現状だ。

このたび、篆刻を専門とされる吉永隆山先生にお越しいただき「篆刻ゲスト授業」が実現できたことは、喜びに堪えない。吉永先生は、毎日書道展篆刻部の審査会員であり、これまでに依頼印をたくさん手がけて来られた。同時に女子美術大学、カルチャースクールなどで篆刻の指導にもあたられている。わかりやすい解説とプロの技術を体感できた学生達の感動は、アンケートに如実に現れ、この授業が意義深いものであったことを物語っている。

時間の関係で、吉永先生にお願いした工程があったが、正確な印材整形と字入れをしていたことが、すばらしい印の完成につながり、満足度の高いものとなった。

中国からの留学生が8名在籍したが、篆刻の経験者は0であった。篆刻のルーツは中国、印材は中国産を使用したのだが、自国の文化に日本で触れ、感慨もひとしおのようだった。「吉永先生は、すごかった！ その授業で篆刻の歴史や作り方がよくわかりました。」「はじめて篆刻をやりました。自分のやり方が鈍かったです。でも先生に一から教えていただき、とても楽しい時間でした。」などのコメントが寄せられた。

中国の留学生が受講生に加わるようになった当初、筆者は緊張して教壇に立ったものだった。何ととっても、幾多の漢字の名品を生んだ書道のルーツの国からの留学生を迎えるからである。その後、中国の現在の学校教育では、日本以上に書道の時間が少ないことを知った。留学生達は自国の名品を手本に、筆者の授業を真剣に受講してきた。その姿は、日本の学生と融合し、よい刺激を与えあっている。

今回の「篆刻ゲスト授業」もしかりで、さらには中国の留学生達がとても手先が器用で、印刀の扱いが上手であったことが新発見であった。

お忙しいなか、ゲスト授業をお引き受けくださった吉永先生にあらためて深謝申し上げる。また、このゲスト授業の実現に向けてお骨折りいただいた研究室の先生方に心より御礼申し上げ、次年度もこの流れを継承したいと切に願っている。

なお、「篆刻ゲスト授業」の授業風景は、2014年度のオープンキャンパスの展示物としても活用された。







写真10 学生印稿



写真11 吉永先生自宅作業



写真12 篆刻授業看板



写真13 印刀持ち方



写真14 印刀の角



写真15 印刀角度



写真16 印刀往復



写真17 印泥プラスチック

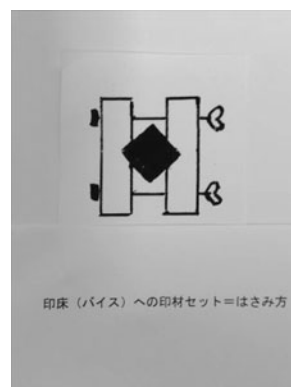


写真18 バイスの挟み方



写真19 吉永先生補刀



写真20 吉永先生押捺

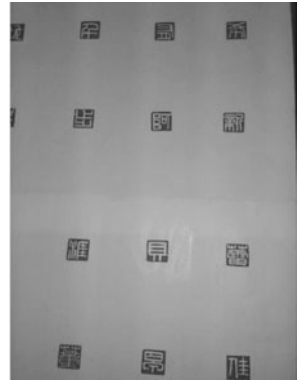


写真21 印影



写真22 堇さん印影

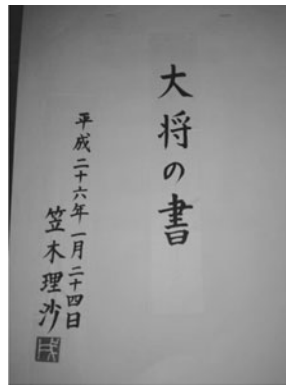


写真23 学生書作品まとめ

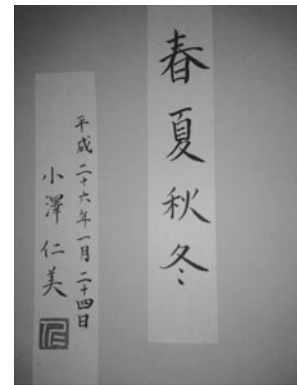


写真24 学生書作品まとめ

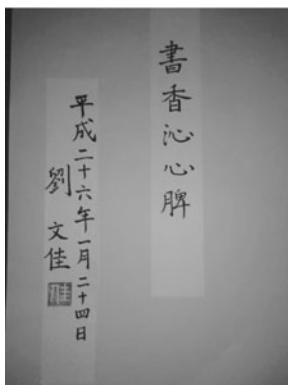


写真25 学生書作品まとめ

